

西荻窪で朝食を

目が覚めると、天井が見えた。

あ、これは自分の部屋の天井ではないなと思っっているうちに我にかえた。

申し訳程度にかかっていたタオルケットを引き寄せて起き上がるのと、隣に寝ていた男が跳ね起きるのがほとんど同時だった。

お互いの顔と顔が合った。口がポカンと開いたままだ。

目の前にある顔はどことなく愛嬌のある顔だった。この顔の持ち主はいったい誰だろう。

「ちょ、ちょっと。」

そう叫んだのがほぼ同時だった。

「やだ！なに！どうして？ここどこ？」

「ここは・・・」

愛嬌のある顔はわたしの金属的な叫び声に一步ひるみながら、部屋を見回し、そして唾を飲み込んでしっかりと言った。

「お、おれの部屋。」

頭のコンピューターが忙しく動き始めた。とにかく今、わたしは見も知らぬ男の部屋で目を覚ました。これは、ゆゆしき事実だった。

「ちょっと、あなたまさか・・・」

「えっ？」

男は自分が何を聞かれているのかを理解すると、しどろもどろに自分の記憶を巻戻し始めている。

「な、なにも・・・」

「したのー！」

「してないよ。」

「ほんと？」

「してない。してない。」

男は私の勢いに押されて、そういながらも、まだ記憶の意図をたぐっている様子だった。やがて自分の下腹部をそろりと確認すると小さくうなづいて、もう一度独り言のようにつぶやいた。

「してない。」

頭の奥の方が、鉛のつまっているようにズシンと重い。明らかに昨夜の酒がしっかりと尾をひいていた。

酒・・・酒・・・酒・・・

「あ、あの・・・」

男は私に何か言おうとしてやめると、台所へいき、蛇口をひねり、そしてそのなかへ自分の頭を突っ込んだ。

私は、部屋の入り口に転がっている自分のポシエットをみつけて、すぐに手元にたぐり

よせた。

10畳はある広いワンルームだった。システム・コンポの脇には山下達郎の一番新しいアルバムジャケットが無造作に置いてある。壁にそのままかけてあるハンガーには、アイボリー・ホワイトのサマー・ニット・セーターや、スウェットの上下が、きちんと掛かっている。正面の壁の一番いいところで、こちらの状況など何も知らぬと言った風情でリチャード・ギアがほほ笑んでいた。

記憶が次第に蘇り始めた。

「確か、ゆうべは・・・」

男はタオルで頭を拭きながら、台所から戻って来ると、平気で私とそう遠くないポジションに腰を下ろした。「冗談じゃない。私は再びもとの距離まで後ずさりした。」

「ゆうべ、吉祥寺で・・・」

そういつて、男は私の顔を見た。私はコクンと頷いた。確かに、それはまちがいない。

「一緒だった？」

覚えていないという意味で私は首を横に振った。そう、確か昨夜は会社がひけてから、友達と新宿でシヨッピングをして、その後、飲みにいこうということになり、勝手知ったる吉祥寺へ繰り出した。

「美江子や里美は？」

「えっ？」

「一緒に飲んでた。」

「一緒に飲んでた？」

記憶がだんだんと鮮明になってきた。まちがいない。パブのカラオケで『恋におちて』を入れ込んで歌っている里美や、隣の大学生をからかってわらいこらげている美江子がだんだんと、はっきりとした映像になってきた。

飲んだ。そうだ、昨日は会社であのセクハラ課長につまらないことで、ねちっこくやられてムシヤクムシヤしていたせいもあって、とにかく3人でおもいきり飲んで、はてにはしゃいだ。

この男は・・・？ そうだ、そういえばこの男、確かにあのパブにいた。会社の同僚らしき2、3人と飲んでいた。

その同僚の一人と、美江子がローリング・ストーンズで盛り上がってしまい、彼らのおごりということで店をかえた。そうそう、そこまではどうやら思い出せた。

「正田とかいったっけ？」

「えっ？」

「正田さんのせいだな。」

男は愛嬌のある顔で笑った。正田というのは、憎きセクハラ課長の名前だ。

「せいというよりは、おかげかな。」

男は脱ぎっ放しのスーツのポケットから、タバコを取り出すと口にくわえて火を点けた。

「吸いますか？」

「い、いえ。」

日曜の朝だ。オーデイオのデジタル・クロックがもうすぐ9時になるところだった。

「あなたの友達の・・・ほら」

「えっ。」

「ほら、あのローリング・ストーンズが好きだって聞いていた彼女・・・」

「あ、美江子。」

「そうかな、美江子さんっていったっけ・・・うん、その美江子さん。」

「あれから、田中とホテルへいっちゃったかな。」

その可能性はあった。昨夜、悪いけど先に帰ると、彼女から耳打ちされた時、その田中とかいう男も、一緒にいなくなっていた。

「里美は。」

「里美？ああ、もう一人の彼女。」

そういうえば、やたらつまらないジョークを連発する、もうひとりがしきりと彼女をくどいていたっけ。

「彼女、確かアパートが井の頭公園の方とかで、高田のやつがタクシー拾ってあげてたな。」

男はたばこの煙を吐き出すと、私の方をチラリと横目で見ながら思わせぶりに言った。

「どうしたかな？」

悪いけどその目つきといやらしい言い方がいけなかった。よく考えて見れば置かれている状況は私に非常に不利であったが、この男にどうかされるほど私は甘くない。キッと睨みつけると同時に、立ち上がっていた。

「私、帰ります。」

「えっ、ちょっと・・・」

男はややあわてた。そんなに広い部屋ではない。男がたばこを揉み消している間に、私はもう靴を片方履いていた。

「ごめんなさい。私酔っぱらっちゃって、どうかしてました。」

「いや、そんなこといいんだけど・・・」

「なんか、泊めてもらったみたいで、どうもすみませんでした。」

ドアには、鍵がかかっていた。開け慣れない鍵はこういう場面ではたいていスムーズに開かないことになっている。

「ア、それ二重ロックだから。」

男が鍵に手を伸ばそうとする寸前にドアが開いた。日曜日の朝のまぶしい日差しが部屋に

差し込んだ。

「あの、よかったらコーヒー入れるけど・・・」

「いえ、いいです。けっこうですから。」

男の顔には、まいったなという表情がはつきりと伺えた。

こんな時、浅野温子ならスパイスのぴりりと効いたセリフのひとつもおいていくのだろうが、あいにく勉強不足で用意がない。これっきり帰ったんでは、ちょっと大人気ないかなという気もしたが、もう勢いがついてしまっていた。

「じゃあ。」

行こうとすると、未練たっぷりといった口調で男が呼び止めた。

「あの、また会えないかな。」

ちらりと考えたがやはり、断固としていった。

「悪いけど、なんかこういうの好きじゃないから。とにかくすみませんでした。」

これも、浅野温子にはほど遠かった。

電柱には、『西荻窪×丁目』とある。ちょっと歩くと、青梅街道にすぐ出た。そこで自分の現在位置がやっとわかった。家までそう遠い距離ではない。通りに面した小さなブティックの看板を見て、ゆうべは確か、このあたりで降りたなとぼんやり思い出した。

電話ボックスがあったので美江子のアパートに電話して見たがだれも出ない。どうやら、あの彼氏とそうなってしまったかな。月曜日が楽しみだ。今別れて来た男の愛嬌のある顔がふと浮かんだ。考えてみれば、あの部屋をあたふたと飛び出してきたのはやはりちょっと大人気なかったかなと思う。どうこうなるという気はないが、せめてコーヒーくらいは、つきあってきてもよかったかなとちょっと後悔した。

電話ボックスを出て、ちょっと綺麗なブティックのショー・ウィンドウにさりげなく飾られていたマリリン・ブルーのワンピースに目をやった瞬間、ドキッとした。

「あっ！」

昨日、友達3人で吉祥寺に出る前に新宿で買った花柄プリントのワンピースである。どこへ置いてきたんだらう。血の気がスーッと引いた。襟のあたりが華やかなわりには、スカートがすっきりしていて、ちょっと素敵なワンピースだった。どこに置いてきちゃったんだらう・・・

私はワンピースのはいったピンクの紙袋を提げていたはずの自分の左手の記憶をゆっくりとたどり始めた。

最初のピア・ホール、2件目のカフェ・バー・・・いや違う、タクシーの中まではしっかりと持っていた記憶がある。とすると・・・

私は今、出て来たばかりのあの男の部屋の中を頭の中で探し始めた。

「あ、もしかしたら。」

そういえば、男の部屋のコンポのスピーカーの上に置いたような気がする。そうだ、きっとそうだ、あそこに違いない。

今、あの調子で出て来たばかりの男の部屋に戻るの、あまりかっこよくないのはわかっていたが、手取り14・5万のそこそのOLにとって、やはり14・800円はあきらめがたかった。あの男の愛嬌のある顔を思い返しなが、私は今来た道をまた引き返した。

「あれ、どうしたの？」

男はうれしそうに驚いた。さっきまで着ていたスーツが壁のスウェットと入れ替わっている。

「しばらくだね」

悪いけどおかしくもなんともなかった。いやいや、悪いけど今は彼のユーモアとやらを理解してあげられる余裕はなかった。

「あの、ちょっと忘れ物したみたいなんだけど。」

「えっ、忘れ物？」

「あ・・・」

と指さした先のコンポのスピーカーの上にあるはずのピンクの紙袋はそこにはなかった。

「あの、なんだろ。忘れ物って。」

「ピンクの、これくらいの紙袋なかった？」

「紙袋？」

「あの、スピーカーのところに置いたような気がしたんだけど。」

「スピーカー？」

男は多少、拍子抜けしたような面持ちで、部屋の一角に陣取るコンポの左右のスピーカーの周囲を見回した。スピーカーの裏まで頭を突っ込んでくれたが、紙袋はそこにはなかったようだった。それほど広い部屋ではない。男はそこらあたりをザッと見回しながら・・・

「なんか、ちょっとないみたいだけど・・・」

そういって、肩をすくめた。

「ちょっと、いいですか。」

返事も聞かずに部屋に上がると、先程と中の様子はほとんど変わっていない。スピーカーの上に、カセット・テープはあるが、確かに紙袋は見当たらない。私はそこに彼がいるのを忘れて、祈るような思いであたりを探したが、やはり紙袋はなかった。

私は、泣きたい気持ちになった。

「ピンクの紙袋って・・・ああ、確かピーコックを出るときは、持ってたよね。」

「ピーコック？」

「ほら、2件目にいったカフェ・バー。」

「ああ・・・」

「ええっと、あれから駅前に出て・・・タクシーを拾って・・・」

男はベッドに腰掛けて天井を見上げた。そして、ゆっくりと視線をめぐらして最後に私の顔を見た。

「ねえ、確かタクシーに乗る前、吉祥寺の駅前で君がもどしそうになったよね。」

「えっ。」

「ほら、サンロードの路地で僕が背中をさすってあげたじゃない。あの時はどうだったけかな。紙袋、持ってたっけ？」

情けない。それが事実なら、恥ずかしい話、まるっきり覚えていない。私は真っ赤になった顔を思わず彼の視線からはずした。

「俺も、だいぶ酔ってたからなあ。ア、いや、そうだ、君を担いでタクシーを拾うまでは、君のポシェットと紙袋は俺が持っていたような気がするなあ。」

穴があったら入りたいような気持ちだ。私はすがるような気持ちで男の顔を見た。

「あれ、きつとタクシーじゃないかな。」

「タクシー？」

「うん、この部屋にないとすれば、後はタクシーしかないんじゃないかな。」

まったく、タクシーまで持ってきて来てくれたなら、なんで部屋までしっかり持って来てくれなかったのよ。私は心の中でそう叫びたかったが、まさか声にすることはできない。しょうがない、私は14,800円をあきらめかけた。

「電話してみようか。タクシー会社。」

「えっ」

愛嬌あるだけだった顔が、いくらかたのもしく見え始めた。

「あのタクシー、確か・・・」

彼は案内に電話をかけると、そのタクシー会社の名を告げ、ナンバーをメモした。

「この、タクシーだったと思うんだ。ねえ、運転手の名前見たかな？覚えてる？」

私はプッシュホンを押す彼の顔を見ながら、首を横に振った。

「あれ、おばさんだったんだよね。あの運転手。なんか、珍しいんで覚えてたんだ。それでわかんないかな。」

気がつくと、コンポのスピーカーからは、シャカタクの軽快なインスタ・ナンバーが流れていた。先方の電話がつながる間、彼の指がかすかにリズムをとっていた。

「あっ、もしもし、□□タクシーですか・・・実は、ゆうべそちらのタクシーにのったんですが、忘れ物をしちゃったらしくて・・・ええっと、吉祥寺の駅前から西荻窪までです・・・えっと、名前はわからないんですが、女性の方でした・・・わかりますか？ちょっと、ご年配の方で・・・わかりますか？・・・ええ、ピンクの紙袋なんです・・・はい・・・はい・・・ああ、そうですか。ええ・・・ええ・・・はい・・・そうですね。分かりました。じゃその頃ま

た、電話してみますので・・・はい・・・じゃあ、どうも。」

彼が受話器を置くのと同時に、NIGHT BIRDS のピアノのメロディが滑り込んできた。

「とうわけで、その運転手が帰って来るのが十時くらいなんだって。だから、あともう1時間したら、ワンモア・トライだね。」

「あの、どうもすいません。」

「どう？よかったら、それまで朝食でも一緒に食べていきませんか。これからすぐ作るから。」

「えっ、いいですよ。」

「まあ、いいじゃないスカ。これでもちょっと自信あるんだよね。」

「ええ、でも・・・」

「ま、ちょっと座っててよ。すぐだから。」

彼は素晴らしい終わらないうちに、キッチンへ立っていった。どうやら、今度は帰るタイミングを逸してしまった。キッチンから彼の声がした。

「大丈夫だよ。」

「えっ?。」

「きつと紙袋、でてくるよ。」

「ええ。」

彼は冷蔵庫から、玉ねぎやハムや卵やらを取り出すと、案外慣れた手つきで刻み始めた。とてもそんなことをやるようには見えないだけに、なにか微笑ましい。気がつくくと、赤いエプロンまでしていた。「やっぱり・・・」といいかけると・・・

「あれっ!」

「えっ」

「あ、いやまいったな。食パンがないや。」

彼は、キッチンから顔を出すと、例のおもいきり愛嬌ある笑顔でいった。

「ごめん、ちょっと、そのコンビニまで行って、パン買って来るから。すぐ戻るよ。CDそこにいろいろあるから、適当に聞いてて。」

「あの・・・」

私が言う間もなく、彼は風のように飛んでいってしまった。ひとり残された部屋に私は、腰を下ろした。たしかに、あの男、ちょっと危なそうではあるが、そう悪い男には見えな。正直なところ、お腹もすいていたので、ここは素直に彼の作ってくれる朝食とやらを御馳走になることにしよう。彼の言うように、紙袋も出てくるわよ。きつと・・・

それから、きつかり30分後にテーブルのうえに並んだメニューはちょっととしたものだった。オムレット、フレンチ・トースト、シーフード・サラダ、カレー・シチュー、紅茶、そしてポカリ・スウェット。どうにも最初の一言が出てこなかった。



「さあ、お待たせ」

といったその顔は、一枚の絵を描き上げた画家のそれを思わせた。

「いつも、こんななの。」

「たまにだけどね。」

「いつも、自分でつくっちゃうの？」

「嫌いじゃないんだよな。」

「これじゃ、お嫁さんじゃないね。」

「よく、言われる。」

二日酔い覚ましには一番というポカリ・スウェットをグビリと飲んだ後の彼の食べっぷりがまたすごかった。私が紅茶を飲んでフレンチ・トーストを半分食べる間に、目の前のメニューを鮮やかにペロリとたいらげてしまった。

「どう？」

「おいしい。」

「そう。よかった」

男はうれしそうに笑った。

「どこで、覚えるの？」

「ひとり暮らしなんかしているとね。なんとなく。作ってくれる彼女もないしね。でも、このフレンチ・トーストは、ほら映画に出てきたじゃない。あの・・・」

「『クレイマー・クレイマー』」

「そう！あれ見てね。」

男の食欲に影響されてか、それから7分後には、私もほとんど食べ終えてしまった。食器をキッチンに運ぼうとすると、彼は「いいから、いいから」と私を制して、てきぱきと後片付けを始めた。その後ろ姿を見ながら、私は家では母がいなければ、たばこひとつ自分では取ろうとしない父の姿を思い出した。

「さて、じゃあ電話してみるか。」

彼がキッチンから戻って来ると、あれからちょうど1時間というところだった。

「えっ、ない・・・ああ、そうですか・・・はい、いや、どうもお手数でした・・・いえ・・・いえ・・・はい、どうも失礼しました。」

彼は受話器を置くと溜め息をついた。

「まいったね。ないってさ。」

い　いくらかポジティブになつていた気持ちだが、再びネガティブになつてきた。彼は申し訳なきそうにしていたが、もちろん彼のせいではないのはわかっている。とにかく正体がなくなるまで飲んでしまった自分がいけないのだ。彼はスーツのポケットからマッチをふたつ持って来るとそれを見ながら一件目に言ったビア・ホールと二軒目のピーコックにそ

れぞれ電話してみてくれたが、やはり朗報は聞けなかった。

あと可能性があるとすればタクシーを拾った吉祥寺の駅前だが、もしそうだとすれば、まず出て来るわけではないだろう。あのワンピースを諦めなければならぬと思うと私は泣きたくなった。

「あの、どうもすみませんでした。」

「ああ、いや」

「朝ご飯まで御馳走になっちゃって。」

「いや・・・」

そうてなつては、もうここにいる理由もないわけだ。私は彼の名前を聞いておこうかどうか、ちょっと迷ったが、やはりやめて、そのまま帰ることにした。

「あの、じゃあ私、帰ります。」

「え、あそう・・・」

今度はさっきと違って、ゆっくりと玄関に向かった。キッチンには朝食に使った食器がきちんと水きりに並べてある。靴を履いてドアを開けようとしたとき、なにかいいえそうだった彼がきりだした。

「あの、まっすぐ帰るの？」

「ええ」

「忘れ物出てこなくて残念だったけど、よかったらこれから映画でも見にいきませんか？」

私は、ちょっと考えた。

「ええ、でもやっぱりいったん家へ帰らないと。」

「じゃあ、いったん家へ帰って、また出て来るとか・・・」

「ええ、でも夕方には用事もあるし・・・」

用事とはいっても、たいした事ではない。

「そう、残念。」

「ごめんね」

くるりと振り返って外にでようとすると、閉まるドアを手で押さえながら彼は――

「どうやって帰る？」

「タクシー拾う。」

「じゃあ、通りまで送るよ。」

「え、いいですよ・・・」

と言いつわらないうちに彼は、部屋に戻ってオーディオの電源を切って、ジャケットをひっかけででて来た。

「たばこも、なくなっちゃったし。」

外へでると、日差しはさっきより強くなったように思えた。西荻窪の日曜日、いつのまに

か季節はすっかり春めいていた。アパートの前で、父子がキャッチボールをしている。子供のかぶっている帽子はヤクルト・スワローズ。そういうえば眼鏡のおとうさんはどことなく野村監督に似ている。

「そういえば、名前書いてないね。」

きっかり30センチの距離をおいて、時速3キロで歩きながら彼が言った。

「名前？」

「よかったら教えてよ。またどこかで会うかもしれないし・・・」

私は少し考えて、結局23年間、付き合ってきた自分の名前を教えた。彼はその名前を2、3度復唱すると、それから自分の名前を私に告げた。

「もっとも、これはすぐ忘れられちゃうかな。」

彼はそう言うのと、あの愛嬌のある笑顔を見せた。「また会えれば」という彼のご希望にお応えする気にならないのは、よく考えれば、この彼を私が、決していやだからというわけではない。まちがっても理想の男性とはいわないが、よく見れば決して、ルックスも悪くはないし、少なくとも嫌いなタイプではない。つまりは、巡り合わせの問題なのだ。ワンピースをなくしてしまったのは、けして彼のせいではないのだが、理屈の問題ではない。とにかく、その事実を私をひどくネガティブにしまった。ここは根津甚八にでも誘われない限り、とてもデートだなんて気分にはなれなかった。

これでおわってしまうのは、正直いって少しは残念だが、この男にはそんなつまらない理由をさしひいても、胸がときめくというほど素敵な男性ではなかったのが不運と思っあきらめてもらうしかない。いつかまた、しかるべきタイミングで再開することがあれば、そのときは、デートくらいお受けしますわ。

彼の料理のレパトリーについて、とりとめもない会話を交わしているうちに、さきほどの通りのブティックが見えてきた。彼の歩く速度は時速2キロになっていた。

「じゃあ、すいません。ここでいいです。」

ブティックの前まで来ると。私は彼に向き直ってそう言った。彼はかすかに頷くと何か言おうとしたが、それを飲み込んで、通りに出ると手を挙げた。信号待ちをしていたタクシ―が、後ろから来たスクーターをやり過こして、路肩に止まって扉を開けた。昨晚、タクシ―から降りたのもちょうどこのあたりだったなと、私はぼんやり思った。

「どうもありがとう。」

そういってタクシ―に乗ろうとすると彼が突然、妙な声を出した。

「あれ。」

「えっ？」

彼の視線は私にではなく、すぐ前にある郵便ポストに向けられていた。

「あれえ。」

2回目のそれは、オクターブ上がっていた。

彼は郵便ポストの上をゆくりと指さした。何事かと思ってその指のさす延長線上を目で追うと……

「あ、やだあ。」

そこには、ピンクの紙袋がちょこんと座っていた。

彼が取ってくれた紙袋の中をおそろおそろ覗いてみると、まちがいなく昨日買ったワンピースがニッコリほほ笑んでいた。

「やだあ、うそみたい。」

それはほとんど、悲鳴に近かった。そのキーの高さに、タクシーの運転手の目が点になった。

「ああ、それね……」

ふりむくとブティックの品の良さそうな奥さんが立っていた。

「店を開けた時から、そこにあっただわよ。うちの買い物だったら預かっておこうかと思っただけど、違ってみないだし。」

「あ、どうもすいません。」

「ゆうべから、置き忘れてあったんじゃないの？」

「ええ、実は。」

私の代わりにそういつてくれたのは彼だった。

「よかったわね。普通ならまず持ってかれちゃうわよ。」

ブティックの奥さんはそれだけいうと、笑いながら店の中へはいつていった。

「よかったじゃない。」

気がつくとも紙袋をすっかり抱えながら、そういつてくれた彼の袖口を、私はしっかり握っていた。彼の顔がなんだか、根津甚八に見えてきた。

「あの、よかったら来週の日曜日、映画でもどう？」

根津甚八がそういつた。

「来週？」

「なんか、用事ある？」

「うん、来週の日曜日はちょっと用事あるの。でもこのワンピースも、早く着たいし。」

「え？」

タクシーの運転手が不機嫌そうに早くしてくれと催促していたが、それは無視して私は彼にこういつた。

「今日じゃだめかな？」